

2025年4月

課題本 『読書会という幸福』

向井 和美/著

岩波書店

2022年

◆◆◆4月の読書会から

先月は「私の一冊」で参加者それぞれの一冊を選んで発表しました。今月は選んだ本の感想を読んで感じたことを共有することから始めました。自分が読まない分野の本や新たに読みたいと思った本と出会う機会となっています。

今月の課題本は『読書会という幸福』、参加者が同じ作品を読んで語り合う会に30年近く参加してきた著者が想うこととは。竹原読書会では課題本のリストから感銘を受けた人もいれば、「幸福」と著者は言うけれど賛同しきれなかった人もいました。それぞれの意見から今月の感想文はどのように広がっていくのでしょうか。

(文責:森下)

2025年竹原読書会4月『読書会という幸福』(向井和美 著 岩波新書 2022年) ——読書会の中の幸福探し——

吉川五百枝

〈もしかしたら、わたしがこれまで人を殺さずいられたのは、本があったから、そして読書会があったからだと言ってもよいかもしれない〉

この一文が、私も著者と同類かもしれないと思わせます。もし本がなければ、もし読書会がなかったら…、私はどんな生き方をしていたらと思うても想像ができません。

著者は、読書会を説明するために〈読書会の作法〉〈さまざまな形式〉〈潜入ルポ〉〈読書会記録〉〈課題本リスト〉などの項目で括っていますが、その内容たるや、圧倒されるような本の題名の洪水です。いまさら予備知識を入れてからと思っても、まにあいません。そこは気にしないことにして読むことにしました。

本を読む楽しみを著者は〈はるかかなたの時代から登場人物がやってきて、するりとわたしの心の中に入り込む〉と表現していますが、本の中では、時代や場所、年齢、世別を問わず、登場人物になったり、その隣に座ったりしてあらゆることを経験できます。それは、私も〈人生を余計に生きたような気持ちになる〉著者と同じ気分です。

読書は、個人一人一人が読んで楽しむことが始まりの一步になると思いますが、今月の1冊では、複数の人と読むおもしろさがあることを、読書会の幸福として挙げています。

〈書物の世界を共有したい。〉それが読書会をする事の意味だと著者は語ります。他の人と何かを共有することは、自己中の命を持つ人間には難しいことですから、たとえ、瞬間でも共有出来たという経験ができれば、それは幸福と呼びたいことです。

「読書会」の楽しさとして、著者がこんなことを挙げています。

〈自分1人では絶対に読まなかっただろう本、途中で放り出す本、日常では口にしないような事を話題にする本に出会うことができる〉

〈同じ本でも、他の人の意見で思いがけない視点を得られることがある〉
〈内容について語ると、自分の考えがはっきりしてきて、自分の中の鬱屈した思いを言語化し、吐き出すことができる。語る事は自分を映し出す鏡となる〉
〈何も話すことが無いと思っていても、読書会に身を置くと何かしらの刺激をうけている。相手の言葉で言いたいことが湧いてくる〉
〈文学を媒介にすれば人生のどんな話題でも語り合える。本の内容に、人間の営みや心理についての普遍性があるので、人生を語れる〉
〈本を介して人とつながる〉

ざっと挙げただけでも、複数の人と読む楽しさは、こんなにもあるのだと著者の弁ですが、どの項目も、読書会に参加した経験から言っても、頷くことができます。

「読書会」をしながら、著者が気のついた事。

〈最初から見返りを求めて本を読むなど、邪道もはなはだしい〉

〈人生はそう簡単に見返りが得られるものではない。〉〈本が効率よく感動をえられるように進化したのか。文学を要約することに何の意味があるのか。〉

いずれの意見も、最近の傾向から窺えることなのか、よく目にします。

〈文学を誰かと語り合う楽しさも知って欲しい。文学を通じてであれば、どんなに年齢差があろうと、何の違和感もなく語り合える〉

私の「読書会」経験でも同じ事は言えます。ただ、単語の意味は世代や環境で随分違うことがあり、話の途中で爆笑を引き起こすこともあります。逆に通じないことに寂しさを感じることもあります。読書会が、常に「読書会という幸福」だけではなく、「読書会という不幸」を孕むこともあるというのも忘れられないことです。

〈書物の世界を共有したい〉と最初に著者が述べたことの内容を、〈「魂の交流する場」としての読書会〉と言い換えます。その場について述べる著者が、項を改めて文学について語る章は、一段と熱量が上がったように感じました。

「読書会」の実録のように書かれているけれど、著者の〈文学に生かされて〉いる自身のことがひしひしと伝わって来ます。

〈小説は自分の外側にあるものを書くのではなく 我々の内部の部分を書く事〉

それを複数で読んだとしても、読書会の余韻は、自分の内側に留まるでしょう。

〈1冊の本を読んで、自分の心に響く1節をうまく切り取ってきて、なにがどう響いたのかを言葉にする〉これが読書会の様子ですが、その読書会の一コマをうまく切り取ってきて、なにがどう響いたのかを言葉にしたのが今回の課題本です。

〈文学を語ることは人生を語る事〉それを信条にする著者の読書会です。文学が媒介をして、自分たちの病むことや死を迎えることも話し合えるはずですが、自分の最後の領域は語り得ないものなのだ、この著者の属する読書会でさえ、心の混沌を残すもののようです。文学も、語らずして語る事のできる作品もありますが、技量を必要とすることです。

外国の小説は、翻訳を通して日本語になって現れます。著者の知る翻訳学校で 10 人の生徒から 10 通りの訳文ができたという記述があって、言葉というのは世界中が同質というわけでは無いとあらためて感じました。エスペラント語は普及していません。

日本語で読む以上、日本語の作品として読んでいいるなあと思います。時々、この言葉は、

執筆者の言葉ではどういう表現になっているのだろうかと興味をもつこともあります。私の場合、それは英語の話だけだから、やはり、日本文学を読んでいるのだと思っています。日本文学だと考えれば、どう書かれているかという観点も加わってきます。〈文学の力は、現実の複製ではない〉と著者は言います。〈フィクションの中に求めるのは、現実ではなくむしろ真実があらわになる瞬間である〉同感です。

著者自身の人生が 100 年前の作品と深く結びついていることを示すためにこの本はできました。それを示すためには、語り、書かれなければなりません。本を通して自分の人生を自由に語れる場、内向する思いの方向を外に向けられる場、あいまいさを言葉として捉えられる場、天変地異も時間軸の移動も許される場。読書会を持つ事がいかに幸福なことかを語っています。その通り。

読書会は、求めれば幸福を見つけることができる場なのだと思います。

『読書会という幸福』を読んで

◆【 ZK 】

読書会に長く参加していると読書会についての感想、経験がよくわかりさらにこれから会をどう工夫していったらよいかもわかりました。

この本では、翻訳の仕事をしていらっしゃる方のための読書会なので海外の小説を読んだ感想文が中心でした。

翻訳は日本語が特に海外の言語よりできないと訳せないときいたことがあります。語彙が豊富で表現力がうまく、登場人物の感情を深く理解しないとイケないのでしょう。

それぞれの当時人物の視点で読む事、司会する人が前もって皆に質問するポイントを考えておく事も楽しくする工夫でした。

私としては読書会に参加して新たな発見とかほかの人の違う見方を知ることができ自分の世界を広げる事ができました。

一生懸命いきるのに何が正しいのか？どうするべきなのか？頑張っ読まなくてはと意気込んでいましたが、～べきと考えるのが苦しくなるとわかってきました。

楽しんで、その場その場でいろんなアイデアとかいろんな人がいて現場に合わせて一番良い方法を考える事が大切だと感じるようになりました。

小説だけでなく音楽や服、インテリアもそれぞれの好みが違うように同じ本を読んでも感じ方が違うのです。ですから、違う意見があってもそうなんですね。と考えて自分の考えを広げるチャンスにすることができます。

自分をさらけ出す必要もなく、人の考えを参考にして批判することも無いお互いに自由で心地よい会が楽しいと思います。

人と違うことを認めてお互いに平安でいられることは読書会以外でも大切だと思います。正解や正しいこと、人物の間違いを探ることばかりしていると苦しくなると思うのですが、若い時は突き詰めなくなる傾向があったと思います。

楽しい会をこれからも続けたいと思うこの頃です。

◆【 JM 】

幼い頃から本を読むことが好きだった。元市民球場の北西にあった広島市児童図書館（現在は広島市こども図書館）まで自宅から 2km 弱ということもあって、父が自転車の荷台に乗せてよく連れて行ってくれた。円形のガラス張りというおしゃれな建物（後年、丹下健三さんの設計と知った）で、子ども心に夢の国のような場所だった。小学校の図書室には常勤の司書の先生がおられ、恵まれた読書環境だったと思う。

しかし、おとなになると本について語り合える人はいなかった。周りの友人たちは「本を読むと目が疲れる。10分以上は読めない。」「頭が痛くなる。」また「ノンフィクションかエッセイしか読まない。」という人もいる。おもしろそうだったらどんなジャンルにも手を伸ばす私とは、本の話は難しい。

竹原読書会に出会って、本の話ができることが嬉しい。だから、著者が「本を介して人とながる」「ほかの人の意見を聞くことで、自分では思いもかけなかった視点を得られる」と言われるのは、大きく頷くところである。

読書会で、自分では絶対手に取らないであろう本を否応なく読むのも、存外楽しい。途中で挫折そうになっても「皆さん頑張っている」と思うと乗り越えられる。そして、その本が新しい世界を見せてくれる。

しかし、勤務している学校の読書会の様子の章で、他の司書から「あんなに個人的なことを訊きだすのはどうか。」と言われ、「こういう会話こそが学校で読書会をする究極的な目的」と著者が答えるところは、正直怖いと思った。読書会では純粹に読書の喜びに浸って欲しい。決してカウンセリングの場ではないと思うのだ。カウンセリングのような読書会には、私は参加したくない。もちろん、感想を話し合う中で、私的な話題が出て来ることもある。本を読んだことで、他の人たちの話を聞いたことで、救われることはある。でも、それが目的であってはならないと思う。

翻訳しておられる著者は差別的な表現にも敏感であるが、ご自身の家族に向ける眼差しが冷たい。人間って、いい面と悪い面が背中合わせだと思う。短所が見方を変えれば長所になることもある。こういった「本」という公的な場所での表現の中では、個人情報も含めて違和感があった。

今まで 1 人の読書であったものが共有できるものとなり、語り合える友ができた。おもしろい本に出会って「おもしろかったよ」と伝える人がいることは嬉しい。さて、これからどんな本に出会うことができるのか、楽しみである。

著者の所属する読書会は往年の名作、翻訳物ばかりで私にとってはハードルが高いが、年に 1～2 冊はそんな本があってもいいかなあ。チャレンジだ。

◆【 T 】

「永遠の文学少女たち」という言葉にほっこりした。そうなんだ、年齢も読書会に参加した時期も色々だけど、竹原読書会に集まっている人たちは皆「永遠の文学少女」なんだ…

作者は、「読書会の利点は自分では手を出さないような本や挫折しそうな本でも、皆で読

めばいつの間にか読めてしまうこと。生や死や宗教など日常生活ではまず口にしない話題でも、文学をとおしてなら語り合える。他の人の意見を聞くことで、自分では思いもかけなかった視点を得られる。自分の考えがはっきりした形になっていく。」と読書会の利点をかいているが、全くその通りだと思った。私の場合は、難しい本や今まで読んだことがないジャンルの本などは、いつの間にか読めてしまうまではいかななくて、四苦八苦しながらではあるが、読書会の日までになんとか最後まで読んでいます。読んだ後、やっぱり私にはあってなかったと思うこともあれば、この作者の別の本を読みたいと思うこともある。読書会に参加することで私自身の読書の幅が広がったのはとても良かった。

読書会の形もいろいろで、60人参加で1テーブル5～8人の会とかびつくり。「文学を語ることはわたしたち自身の人生を語ることだ。」と作者は述べているが、人生から導き出された読み取りは各自違っているだろうし、これだけの人が集まると、多種多様な考えや解釈が出てくるだろうと思われる。人はそれぞれで違う道を歩んできているのだから考えも違って当然で、「課題本へのリスペクト」と共に異なる考えを持つ発言者へのリスペクトも大切だなと思った。

IV Vの「文学に生かされて」の中で、多くの本のあらすじや感想・読書会での話し合いの様子が書かれていて、いろいろな本が興味深く紹介されている。書籍の推薦書として自分の興味のある本を探すのも楽しい。私は、「黄色い本 ジャックチボーという名の友人」(高野文子 作)が面白そうだなと思った。一度読んでみたい。

◆【KH】

竹原読書会の仲間に入れてもらってからほぼ1年が過ぎた。課題本を読むことは少しも苦にならない。たまに絶対自らは手に取らないなという本が混じってはいても。ところが、自分の感想を綴ることに、これほど苦勞するとは想定外だった。自分の書いた文章を読み返すと、なんとも薄っぺらい。文章くらい書けるわよという誤認？根拠なき自信？とにかく、ダメダメだとガッカリしてばかり。なぜガッカリするのか。薄っぺらい読みしかできていないことが明らかになるから。そして書くことに伴う責任故か。発言にも責任は伴うけれど、文字として記録されると思うから？でも薄くても、これが私なのだと認めて、少しでも伝わる文章を書こうと頭をひねるしかない。なにせ課題本は毎月変わるし、読書会が終われば感想文の締め切りはすぐにやってくる。で辛いかと問われればそんなこともなくて、参加者の皆さんが今回はどういう感想、意見を述べられるのかと、読書会の日がくるのが待ち遠しい。参加者個々の意見を聞いて、へっ！と納得したり共感したり。堂々とした意見の述べっぷり(こんな表現があるのかしら?)に惚れ惚れしたり。思いもしない角度から、こーんな風にも見えるかもね、と意見をくださる先生のお話を伺う楽しみも大きい。

というわけで、今回もこの本でどんな感想文を書けばよいか、題名ばかりで読んだことない本がずらり。困ったなあというのが正直なところだったが、中には終始楽しくない(辛くなる)読書会も存在するよという話も出てきた。なるほど、読書会に参加して幸福を感じるかどうかは、個々がちゃんと認められているかどうかにかかっているのだ。発言を否定されでもしたら辛く

ていたたまれない。1冊の本に関して、こんなに多様な読み方、(好き嫌いを含む)があるのかと驚く→視野が広がる→読みが深まる。時には覆される場合もある。それもまた楽しい。

矛盾するようだが、この『読書会という幸福』という題名の本の中で印象に残っているのは、P130 ミッシェル・クオ『パトリックと本を読む』—絶望から立ち上がるための読書会 神田由布子訳、白水社 2020年に関する記述だ。

様々な本を、著者とパトリックという少年が1対1で読みあった記録。読書会としては異色。個と個が読書体験を共有した記録だ。

◎アメリカ最貧地域のミシシッピ・デルタの街ヘレナの教育困難校

◎文章の読み書きは苦手だが、こちらが教えることを素直に吸収し、上達を見せる。しかし著者が学校を離れているわずかの間に、殺人事件を起こす。

◎拘置所で二人の読書会。ライオンと魔女 登場人物の気持ちについて話し合う。

◎芭蕉や一茶の俳句 イェイツやホイットマンの詩を二人で交互に暗誦する。

◎本を読みながらパトリックはしきりに尋ねる。「先生はどの部分が好き？」

◎1冊の本を誰かと分かち合い、感動を共有したいというこの気持ちこそ、まさに読書会の真髄ではないか。と筆者は述べる。

◎パトリックの成長に必要なものの少なさ。感動した作者

◎静かな部屋とたくさんの本と、大人の導きが少しだけあれば、ここまで伸びる、なのにそれが与えられる機会はほとんどなかったのだ。

思い返せば、小中高大と、図書室は大好きな場所だった。特に高1の時の担任が国語の先生で図書館司書も兼務されていた。別に図書室に行ってこれといった読書談義をしたわけではないが、いつも大好きな先生がそこにいるという安心感。忙しく追い立てられていたハードスケジュールの高校生活の中で、あそこだけ別の時間が流れていたような気がする。

本を仲立ちにした対話ができるようになったのは、随分年をとってから。気の置けない仲間と感想を述べ合い、読みを深めたり、お互いに深め合えたり。共感の喜びこそ、読書のいや、生きることの無上の喜びだとしみじみ考えた。

◆【 K子 】

「読書会という幸福」が今月の課題本でした。私も読書会には幸福しあわせを感じているひとりで、す。十人程のメンバーに月に一回会える楽しみ、同じ本を読んでこんなにもイロイロな読み方をするのか…奥が深い！面白い！春・秋の彼岸には団子を作ってくれる人あり。今月の課題本の作者は翻訳家です。単純にはあ～そうですネ！とはいかない読書会が多く紹介されています。さまざまな形式のなかのひとつ(朗読を採り入れる)(輪読形式)には興味をもち

ました。その他多くの読書会があります。私のお手上げは、外国文学の長編を全巻読むという形式。片仮名なので人名か地名なのか疲れてしまいます。自分にヒットな作品にはルンルンで読み感想も多く語れますが…苦手なもの(沢山あるのです)は幸福でなく苦痛を感じます。でも読書会に参加しているのは、課題本には色々なジャンルのものが選ばれていますので、嗜好の激しい私には良いお薬なのです。読書会の鉄則

- ・できるだけ欠席しない(O.K です)
- ・課題本は必ず読み終える(活字だけ読むものもあります)
- ・作品への敬意をもって語り合う(?)
- ・雑談をしすぎない(いつもフライングしてます反省)

私は竹原読書会しか知らないのですが… 満足・満足です。

◆【 望月悦子 】

講師の吉川先生は「読書会という幸福」に対して「読書会という不幸」もあるのではないかとおっしゃった。この先生の言葉から思い出したことがある。1970年の大阪万博(テーマは「人類の進歩と調和」)の時、岡本太郎は「進歩の先だけ調和があるわけではなく正反対なものをぶつけ合うことによってむしろ新しい価値が生まれてきたり、賛成賛成が一緒になって叫べば調和するかと言えばそういうものじゃあない」という文言を思い出した。私にとって初めて参加した読書会はとにかく面白くもなく退屈でやめてしまった。その理由は、その時の会のリーダーが課題本にも記載されている作法や約束ごとなど勉強なさっていたのでしょうか、大変威圧的でリーダーの思い通りに展開されることを良しとしているようでもあった。これなど正に「読書会という不幸」と言えるのではないかと思う。

著者は色々な読書会を体験し、試行錯誤しながら読書会の在り方を模索している様子が覗える。しかし正しい正当な読書会であれば幸福であると言いたいのだろうか。文中に「我が読書会」という言葉が度々出てくる。

今回はあえて課題本の「読書会という幸福」の題名に拘って批判的な視点でまとめてみたいと思った。

著者は家庭環境から「わたしにとって本は現実逃避の手段であり、人間の機微を教えてくれる人生の学校であり悶々とした想いを昇華する場でもあった(Pi)」というところから彼女の読書が始まり、読書への価値観の基底がここにあるのではないか。「人間の絆」(サマセット・モーム著)のなかでの「主人公の少年は読書という実人生における苦痛からの避難所を見つけたのだ。「人間の絆」がモームの自伝的作品であることを考えると、彼にとってこの瞬間こそが文学への目覚めであり、作家への第一歩だったといえよう(Pii)」という想いに共感できたのであろう。本は現実逃避だけの手段ではないと思う。興味関心・未知への探求、夢や希望、人間の機微等々語りしえないものを私たちに与えてくれる。

もう1点気になることは、「文学を語ることは人生を語ること。それが我が読書会の信条であったはず。それならば、死や宗教について語り合っていたあの読書会の場で、文学を媒介にして、ご自分の思いをせめてほんの少しでも吐露することはできなかつたらうか。もしか

したら、胸の内を語るにはあまりに切実すぎたのだろうか。・・・私の背後にはつねに先生がいて・・・いつまでたっても先生に褒めてもらいたい不肖の弟子なのである。(P150)「この思いは「我が」「われが一番」という自己中心に固まった狭い価値観ではないか。それを普遍的ものであるかのように語るの**は文学を通した・文学を媒介に**(著者の好きそうな言葉)した読書会への冒涇ではないかとページをめくる程に怒りさえ覚えた。

彼女が言うように「本は自分の人生を映し出す鏡である」かもしれない。「仲間の発言を聞いているうちに自分が耕されていく感じがして」とか「言葉にすることで考えが形になっていく」等々読書会の醍醐味はある。しかし、私(著者)が実践している読書会が一番で幸福なのであると主張しているようで嫌らしさや違和感を覚えた。自分の価値観を押し付けているようで息苦しさを感じた。例えば P54「本を読んで内容を解釈したり、教訓を得たり、意見交換するのはもちろん読書会の利点だろう。しかし、本について語ることは自分自身を語ることでもあるのだ。家族関係やいじめや死など、普段は口にしにくい話題だからこそ、文学という媒介を使って自分の思いを言語化できるのであり、それはとても重要なことだ」と自分の価値観が正しいと強要しているに過ぎない。時には言語化できない内容を押し量り共感しようと寄り添うことで、仲間の機微を理解できることだってあるのではないか。オンラインではないのだから、相手の顔や表情・雰囲気などから思いを理解しようとする事だって読書会の大きな利点ではないだろうか。

確かに「文学に活かされて I・II」では、翻訳家らしく分かりやすく面白かった。彼女の読書量には敬服するばかりで、今後のわたしたちの読書会で選択する課題本に利用できそうだと思えばありがたい。しかし、文学の中には謙虚で奥ゆかしくて思いやりの深い尊敬する人物も登場するはずで、そういうことは自分の鏡に照らし合わせて学んでいかなければならないのである。

この課題本の読書会については、とにかく膨大な量で、取り上げられた本やそこでの読書会の内容も具体的で、翻訳のように丁寧であっても、ただただ「素晴らしいです」「圧倒されました」とはいいがたい。一番大事な何か欠けているように思え、何のために読書するのかと改めて考えさせられた。

今回の担当者は、小さい新書に詰められた膨大な量をいかに整理したものかのご苦労なさったことでしょう。用意された資料を参考にさせていただき感謝です。

◆【 MM 】

今月の課題本を読んで、改めて読書会に参加できる幸運を感じた。竹原読書会との出会いは図書館の職員としての関わりからだった。その後、気になる課題本の時のみ参加し、それから読書会の面白さに徐々にはまっていった。毎月の感想文の中でも時々述べているが、読書会に参加すると自分以外の考え方に会おう。読みにくかった課題本でも10人を超える参加者の中には面白く読む方法を教えてくれる人がいる。面白くなかった本も読書会を終える時には得ることがある。

読書会に参加するようになって、心に余裕ができてきた気がする。仕事でいっぱい

い、家庭での役割でばたばたしていても、読書会までには本を読む時間を作り自分の考えを何となくでもまとめる必要がある。本を読んで自分と向き合う時間を作ることは慣れるまでは大変かと思ったが習慣になるとその自分と向き合うことこそが大事なことになるのだと知る。読書会に参加後、感想文を書くことによってまた自分と向き合うことになる。読書会で得た新たな考えを自分の中に取り入れて更新していく。こうして自分が作られていく。毎月のこのサイクルで自分を更新できることが私にとって何よりの幸福だ。

仕事や家庭以外の場所を持てることもありがたい。本から離れてちょっとした悩みなどを話しても「そういう時期あるよね」などと声をかけてもらったりするとみんな通ってきた道なのか、と思い心強い。本以外の話からも見方、考え方を変えるヒントをもらうことも多い。

今月の課題本でタイトルにある「幸福」に私はおおむね共感したが、読書会では「幸福と言い切れるだろうか」「幸福というからには不幸もある(物事には表裏があるので)」という話が出て、今月の考えるヒントをもらった。

読書会という不幸とはなんだろう。読書会で出たことが答えになってそれ以外の考えを否定することがあれば不幸と言えるかもしれない。また、課題本の中にあるような「読書会を成功させるヒント」という考え方そのものが不幸とも言える。読書会はみんなで作り上げるものでありゴールや正解は決まっていない。あらかじめ引き出したい点が決まっても窮屈に感じる。少しの緊張感がある読書会が理想と著者は書いているが、それだと新規で参加するには躊躇しそうだ。参加者の固定化も不幸の一つかもしれない。

私が読書会の面白さに気づく前に感じていたことは「敷居が高そう」「何かいいことを言わなくては」「好きな作家、好きなジャンルが少ないけどどうしよう」といったところか。そんな過去の私に今言うならば「そんなことはどうでもいい」「とにかく参加してみて」。本を読んで語るということは高尚なことではない。勉強でもないし明確な答えがあるわけでもない。ひとり読書ではできないこと、自分以外の考えに触れることができ、そして自分と向き合う、その時の自分の考えを文章にして自分を更新する。読書会にはまる前の自分はもう思い出せない。